逆向干渉の度合いと被調査者の社会的属性について
――調査の結果から

On the intensity of backward transfer and informants' social attributes
—— in view of the results from a questionnaire

羅　沢宇
英語・中国語教育センター

LUO Zeyu
the English and Chinese Language Education Center

羅（2015a）では、目標言語（L2）が母語（L1）に与える干渉（backward transfer）を「逆向干渉」と和訳し、中国人の日本語習得者に見られる不自然な中国語の用例を中心に記述し、分析した。
本稿は、その延長線上のものとして、羅（2015a）では触れなかった「逆向干渉」の度合い（本稿では非文判断能力の強弱）と個々人の社会的属性（例えば、性別、年齢、日本語レベルなど）との関係を、筆者が中国人の日本語習得者を対象に行った非文判断のアンケート調査の結果に基づいて考察した。
結論として、例えば、1）女性は男性より干渉を受けやすい、2）日本語レベルが初級～中級の学習者が最も干渉を受けやすいといったことが判明した。

The author rudimentarily discussed a phenomenon called "backward transfer"－the effect of the second language on the first, by presenting some instances of unnatural Chinese written by Chinese learners of Japanese and analyzes what the unnaturalness is. (Luo 2015a)
This paper presents a further discussion on this topic by analyzing the result of a questionnaire conducted by the author to survey the relationship between the intensity of backward transfer and social attributes such as gender, age, and Japanese proficiency.
The conclusions of this paper are, for example, female are more easily affected then male; learners at intermediate level are most affected.

キーワード：
逆向干渉　社会的属性　言語接触　マルチコンピテンス　社会マーカーモデル

一、はじめに

言語は絶えず変化している。その変化には、言語共同体内部で発生するもの（「内的変化／internal change」）と他言語（方言等も含め）との接触によるもの（「外的変化／external change」）がある（渋谷2011：104）。後者は、「言語接触」とも呼ばれ、研究が盛んに行われてきた。

今まで、研究の焦点となったのが、A．移住による異なる言語（方言―方言、母語―外国語）の接触（詳しくは、真田2006：102-130）、B．母語を異にする者同士が意思の疎通のために用いる臨時的なもの――ピジン（pidgin）の研究、C．ピジンが後の世代へ受け継がれ母語として使用される事象、いわゆるクレオール（creole）の研究（BとCに関してはSebba 1997が詳しい）、D．方言／外国語の習得（第二言語習得／SLA）に関する研究（例えばEllis 1997、迫田2002）などである。

外国語の習得に伴う母語（L1）と目標言語（TL）の接触は、第二言語習得や海外移住に伴う一世二世の言語使用などの分野に関心が集まる一方、外国語を学ぶ人々の母語の変化に着眼する研究がまだ少ない。また、第二言語習得の分野では、一時期「母語干渉」の研究、のちに「中間言語」の研究が盛んに行われてきたものの、（当然ではあるが、）逆方向の――外国語が母語に与える影響に着眼したものはほとんどない。

さらに、個別言語の接触実態に関する記述も必要だと思われるが、移住を伴わない学習等による中国語と日本語との軽度の接触に関する記述が皆無に等しい。その穴を埋めるため、筆者は羅（2015a）や羅（2015b）などで、「逆向干渉／backward transfer」の概念を提唱し、その実態の記述とメカニズムの解明を試みた。本稿は、その続編として、羅（2015a、2015b）では紙幅の関係で取り上げられなかった「逆向干渉」の度合いと性別、出身、外国語能力などの社会的属性との関係について論じたいと思う。

二、先行研究

第二章では、筆者が提唱する「逆向干渉」という概念と関連のある先行研究を中心に概観したいと思う。なお、本稿は、羅（2015a、2015b）の延長線上にあるため、すでに羅（2015a、2015b）の「先行研究」で紹介した研究成果は、紙幅の関係で、本稿の理解に必要と思われるもの以外は割愛させていただく。

1．干渉（interference）

言語を操る人が移動し、他人と交渉をする以上、言語の接触は避けられない。どの言語も「内的変化」だけでは、その変化を説明しきれない。しかし、研究者がこの事実に気付いたのは1950年代以降であり、「言語接触」が一つの研究分野として確立されたのも比較的最近のことである。

……その後（注：公民権運動が盛んであった1950年代、

筆者より）今日にいたるまで、言語学の分野では、「程度の差はあれ、どの言語もなんらかのかたちで他の言語と接触し、変容を受けて現在の姿を呈している」という認識が徐々に力を得て、言語の実態に即した言語接触の研究が数多く行われるようになっている。（渋谷2010：3）

渋谷（2010）がいう他の言語との接触による変容は、時には「干渉（interference）」現象とも捉えられる。この「干渉」という語の初出は、「言語接触」という研究分野の確立のきっかけを作ったともされるWeinreich（1953）『Languages in Contact : Findings and Problems』である。（日本語訳＝神鳥（1976）『言語間の接触―その事態と問題点』）

Weinreich（1953）は「interference」を下記のように定義している。

> those instances of deviation from the norms of either language which occur in the speech of bilinguals as a result of their familiarity with more than one language
> （2 つ以上の言語に精通しているということの結果、すなわち「言語接触」の結果によって二国語併用者の言語行動に現れる各言語の標準から逸脱する事例のことを「干渉（interference）」の現象という。）
> （Weinreich 1953:1、訳文は神鳥1976:1による。一部句読点変更。）

「干渉」は「deviation from the norms of either language」、つまり接触する言語双方に起きる可能性があるというWeinreich（1953）の指摘があるにも関わらず、その後の研究は、外国語／第二言語を習得する際にみられる母語による干渉（母語干渉）に集中している。母語が外国語から受ける影響に関する研究は、最近になってようやく行われるようになってきた。

2. マルチコンピテンス（Multi-competence）

そういう研究のうち、特筆すべき論考はCook（2003）であろう。編者のVivian Cook氏は、まず自身が1991年に考案した「マルチコンピテンス（Multi-competence）」というモデルを整理し、外国語／第二言語（L2）が母語／第一言語（L1）に与える影響を説明しようとした。Cook（2003）では、「マルチコンピテンス」が「knowledge of two or more languages in one mind」（頭のなかでの二つかそれ以上の言語知識 、Cook 2003：2）と定義され、多言語使用者の頭の中での第一言語（図１のLA）と第二言語（LB）の関係は図１（原書Figure 1.4）で説明されている。左側は完全に分離された状態、右側は完全に重なり合って統合した状態であり、中間に両言語が部分的に重なる可能性が無数にあること（integration continuum／統合された連続体）を示している。

3. 社会マーカーモデル

この「マルチコンピテンスモデル」は、両端の状態を除いて、後に渋谷（2013）の「社会マーカーモデル」に吸収された。

最も単純な「社会マーカーモデル」というものは、人々はDominantコード（Dコード。母語やvernacularなど、支配的なもの）とSubordinateコード（Sコード。第二言語のようなDコード以外のもの）を習得するが、DコードとSコードが融合しており、その融合の度合いが程度問題である、と指摘している（図２、原書図４。渋谷2013：45）。それをさらに発展したものは、図３（原書図９）のように、「複数のコードがひとりの話者の頭のなかでたがいに融合しあってストックされている」としている（渋谷2013：47）。また、この多言語・多変種能力は「つね

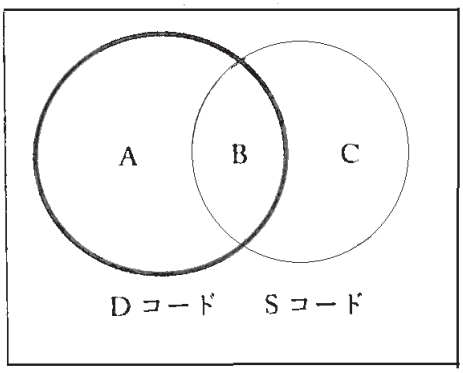


図４　多言語・多変種能力の基本モデル

図2

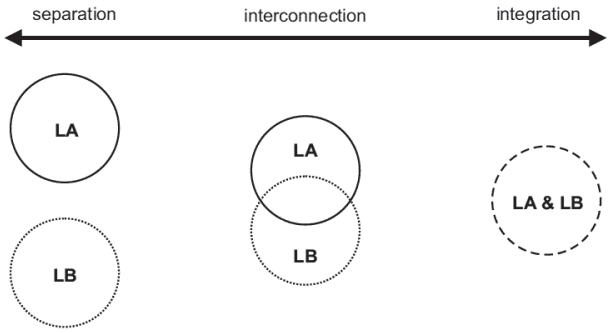


Figure 1.4 The integration continuum of possible relationships in multi-competence

図1

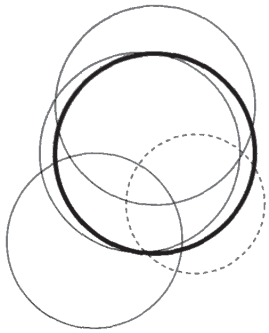


図９　現実に則した個人の多言語・多変種能力モデル

図3

に動くものである」、図２（原書図４）の「DコードとSコード、A・B・Cなどは常に変化する可能性をもつ」といった、「逆行干渉」の本質を突く、いくつかの重要な見解を示した（渋谷2013：48）。

4. 逆行干渉（backward transfer）

Cook（2003）や渋谷（2013）などにより、「逆向干渉」の存在が証明され、理論基礎もできたと思われる。しかし、Cook（2003）の書名『Effects of the Second Language on the First』にも象徴されているように、本稿が考察している接触現象については正式な名称さえ定められていないなど、問題もかなり残されている。

名称についてCook（2003：1）は「sometimes called 'reverse' or 'backward' transfer」としており、本稿の英訳もそれを踏襲しているが、いずれも広く認知されているものではない。また、その和訳も鈴木（2013：1）が「逆行干渉」と訳したが、筆者は羅（2015a）で「逆向干渉」と修正した（詳しい経緯に関しては、羅2015a：91を参照していただきたい）。ただし、この和訳も定着しているとは言えない。

5. 逆向干渉の個別的な記述に向かって

理論面のモデル化などに関しては１～３節で概観したが、「逆行干渉」の具体的な特徴に関する研究はまだ手付かずのままであると言わざるをえない。なぜなら、接触の個別的な記述、殊に日本語と中国語の接触に関しては、第一章にも触れたように、数自体も多くない上、移住に伴う言語接触（例えば在日中国人や華僑の言語使用）が中心になっているからである。

渋谷（2010：4）では移民の言語変容について図４の図式で説明した。しかし、本稿が考察する移住を伴わない外国語の習得による言語接触は、（イ）～（ウ）の段階にしか到達しないのがほとんどであろう。殊に移民の言語使用に関しては、この比較的初期の言語接触に関する記述は、さほど多いとは言えない。

また、こういった個別的な記述は、もっぱら第二言語（日本語）の使用に関心が集まり、移住者の母語（中国語）に目を向けたものはさらに少ない。（研究の展望は、真田2006：125-127に詳しい）

幸い、Cook（2003）以降、（Cook 2003自体も複数か国の研究者によって発表された個別的な記述研究をまとめた論文集である）、沈（2011）、鈴木（2013）、羅（2015a）など、初歩的なものではあるが、少しずつ個別的な記述がなされるようになってきた。

本稿も、「逆向干渉」にまつわる現象や事実の記述、すなわち、逆向干渉の度合いと被調査者の社会的属性との関係を調査して記述することを第一の目的とし、将来そのメカニズムの解明に寄与することを期待する。

三、非文判断調査——[关于汉语使用情况的调查] a、b

第三章では、性別、年齢、外国語（本稿では日本語）能力などの社会的属性と「逆向干渉」の度合いとの関係を調べるため、筆者が断続的に行っている非文判断調査とその初歩的な分析結果を紹介したいと思う。なお、羅（2015a）においては「2011年調査」といい、すでに結果を一部援用したことがある。

1. 用例

調査に先立ち、筆者はまず日本語の「逆向干渉」の可能性が高い、中国人による不自然な中国語の用例を収集した。主な出所は下記のとおりである。（以下羅2015a：91より再掲）

1（a、筆者が実生活やインターネットから収集した表現（単発的な用例）
1（b、筆者が実生活やインターネットから収集した表現（まとまった文章から抽出）
2、某教科書（2007 年版）の序文
3、某学術書（2010 年版）の第一章
4、某辞典（2003 年版）の「あ」部

そのうち、単発的なもの（1（a）を除いて、すべて筆者の研究が本格的に発足した2011年以降の半年間に収集したものである。

なお、例文の文法性、すなわち中国語が自然であるかどうかに関しては、基本的には筆者（調査当時20代、上海市出身）の判断と、辞書や文法書の記述、あるいはコーパスの検証結果両方をもって判断をしているが、書物に記述のない文例、コーパスによる検証がほぼ不可能なもの、文章構成の問題などに関しては、筆者と出版社勤務のインフォーマント（調査当時30代、吉林省出身）、加えて教師を務めるインフォーマント（調査当時50代、上海市出身）の3人の意見によって判断している。このやり方は方法論上問題がないわけではないが、最も現実的、かつ実行可能な処理法でもあるため、問題点を承知したうえで取り入れた。

上記のような過程を経て、筆者は数百の用例を収集した。実際の調査では、被調査者の負担と問題文のバランスを考慮したうえで、筆者が集めた用例から86例をランダムに抽出した。また、これらと比較するため、来ほか（1993）に掲載された日本人の中国語誤用例も、意図的に10例付け加え、計96例を選出し、アンケート用紙AとB、それぞれ48例を調査用の問題文にした。

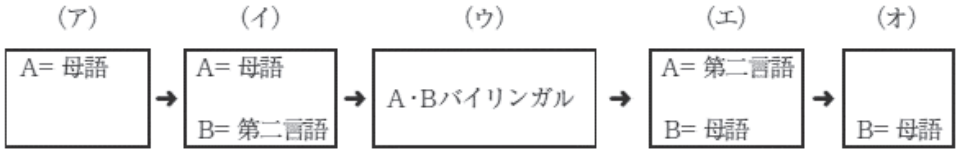


図4

2. 調査概要

実 施 日：2011年9月*、11月、12月；2013年10月；2014年3月
実 施 地：上海（大学J、大学C）*、アモイ（大学X）、大連（大学D）、蘭州（大学L）、日本
調査対象：大学J日本語学科学生*、日本語を第二外国語として履修する学生；大学C日本語学科学生*；大学X日本語学科学生；大学D日本語学科学生；大学L日本語学科学生；筆者の知人その他
調査形式：アンケート用紙AかBによるアンケート調査（選択肢問題*＋自由添削）
調査内容：次節で紹介する
実 施 数：アンケート用紙A、B各180部、合計360部
（*のついている項が最も代表的なもの）

3. アンケート

1）内容抜粋

被调查者属性（请选择最接近的一项）

1、性别：*a*. 男　*b*. 女
2、年龄（实岁）：*a*. 20以下　*b*. 21～25　*c*. 26～30　*d*. 31～35　*e*. 36～40　*f*. 41～45　*g*. 46以上
3、生活时间最长的地区：*a*. 东北　*b*. 华北　*c*. 西北　*d*. 华东　*e*. 华中　*f*. 华南　*g*. 西南
4、日语水平：（曾未参加考试的请自我评估）：
a. 完全不懂　*b*. 稍有了解（会读假名等）
c. 入门（能力考N5，原4级水平）
d. 初级（能力考N4，原3级水平）
e. 中级（能力考N2～N3，原2级水平）
f. 高级（能力考N1，原1级水平）
5、已用于日语学习的小时数：＿＿＿＿＿＿小时
（例：100小时，填大致数字即可；没学过的请填0）
6、平时接触日语的机会：*a*. 完全没有　*b*. 极少　*c*. 有时　*d*. 经常　*e*. 几乎每天

主问卷

请仔细阅读以下句子，判断每一句是否是地道的汉语（*a*. 地道、*b*. 意思能懂但不地道、*c*. 意思不清）。后两者请划线或以[V添加]、删除、置倒▲等记号表示出有问题的部分，如有需要还可在空白处补充说明。

1、（　）这是对我来说很了不起的事。
2、（　）他是我的一个大学高几届的校友。
3、（　）外边仍然有很多来看红叶的人们。

…（後略）

2）説明

a）属性調査

アンケート用紙の「属性調査欄」に下記の項目を記述してもらった。

1、性別（a＝男、b＝女）
2、年齢**
3、最も長く生活した地域（中国の地方区分）
4、日本語レベル（日本語能力試験の成績／自己評価）**
5、日本語学習時間数（自由記述）
6、普段日本語に触れる機会**

**「年齢、日本語レベル、日本語に触れる機会」の三つの項目は、すべて、選択肢aを最小とし、逐次増加する。（20歳以下→46歳以上、まったくわからない→上級レベル、まったくない→ほぼ毎日）

本稿は、項目１、３、４と「逆向干渉」の度合いとの関係を中心に調査する。項目５は項目４の確認のために設けたので、調査外とし、項目２と項目６は、単独の要因として考察しないことにした。

b）非文調査（本体）

アンケート本体は、48問の選択肢問題によって構成されている。

まず、それぞれの問題文が自然かどうかについて、a「自然、問題なし」、b「不自然だが、意味がわかる」、c「意味がわからない」の三段階で評価してもらった。それから、時間に余裕のある調査者に、不自然と判断される箇所を添削してもらった。自由添削の内容は羅（2015a）ですでに一部紹介したため、本稿では触れないことにした。

問題文は、本章第一節で説明したように、すべて何らかの不自然なところがある中国語の文章である。つまり、本来は、すべてbかcの評価が予想される。よって、被調査者の答えに、aが出れば出るほど、非文判断の能力が低下し、「逆向干渉」をより強く受けているといえよう。本稿は回収した問題用紙一枚ごとにaの数（以下「a値」と呼ぶ）を集計し、それと各属性との関連性を考察する。

4. 各属性等の分布

配布した360部のうち、アンケートA 160部、B 150部、合計310部の有効回答が得られた。各属性の分布は下記のとおりである。（図５～９）

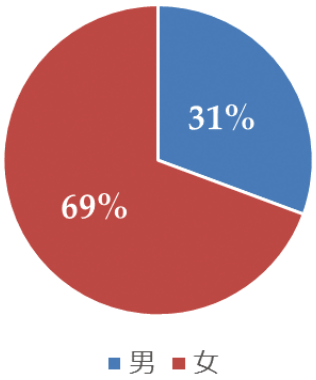
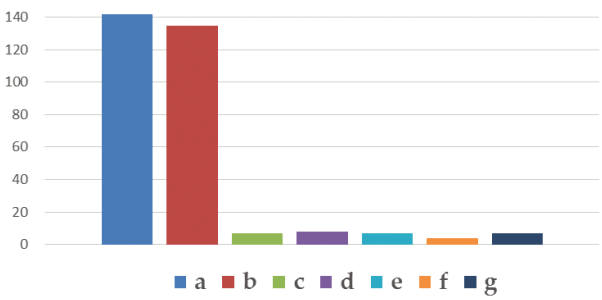
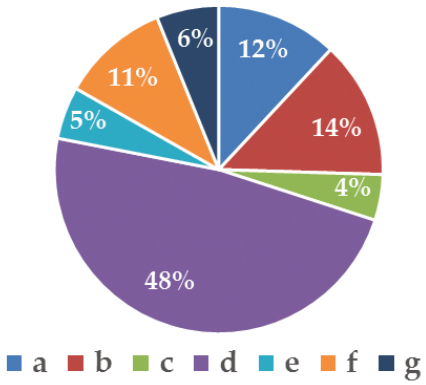


図5　性別分布



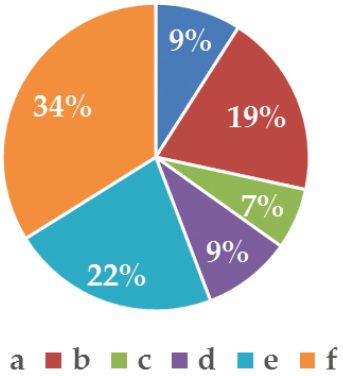
参考：a.20以下 b.21~25 c.26~30 d.31~35 e.36~40 f.41~45 g.46以上

図6　年齢分布



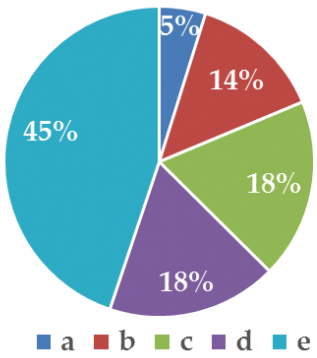
参考：a.東北b.華北c.西北d.華東e.華中f.華南g.西南

図7　地域分布



参考：a.全くわからない b.仮名が読める程度 c.入門
d.初級 e.中級 f.上級

図8　日本語レベル



参考：a.全くない b.少ない c.時々 d.よくある e.ほぼ毎日

図9　日本語に触れる機会

主に都市部にある大学の文系学生を中心に調査を行ったため、男女比、年齢や地域構成に一部偏りが生じたが、（年齢を除いて）サンプル数自体が極端に少ないわけではないので、比較的平均的な傾向が見られると判断した。

5. 集計結果概要

各属性と集計した答えaの数（a値）の平均値（小数は下2桁まで）を表にした。

6. 考察

1）性別と干渉の度合い

全体的に、わずかではあるが、女性のほうが男性よりa値の平均が高い。すなわち、女性は男性より少し「逆向干渉」を受けやすいという結論になる。

その解釈として、下記のような理由が考えられる。

まず、一般的に言語学習においては女性の方が男性より優れているとされている（例えば、白畑ほか2014：89-100）。よって、必然的に女性は男性より外国語と接触す

1）表1　性別／a値平均

a値平均	男	女
全体	19.86	20.84
用紙A	16.98	19.39
用紙B	22.46	22.51

2）表2　地域／a値平均

a値平均	東北	華北	西北	華東	華中	華南	西南
全体	21.19	20.98	19.00	21.17	17.75	18.82	19.89
用紙A	21.71	19.62	16.75	18.96	15.13	16.15	19.69
用紙B	20.87	23.19	22.00	23.18	20.38	22.92	20.33

3）表3　日本語レベル／a値平均

a値平均	全くわからない	仮名が読める程度	入門	初級	中級	上級
全体	17.75	18.13	25.75	21.83	20.88	21.10
用紙A	15.47	16.23	24.09	22.86	16.80	19.77
用紙B	20.38	20.03	27.78	20.87	24.11	22.87

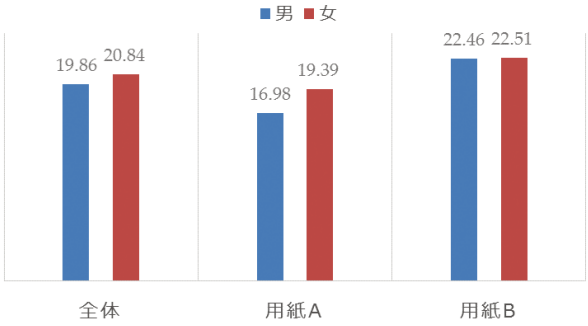


図10　性別／A値平均

る時間が長くなり、頻度も高くなると推測できよう。

また、性差について、井上（1991）は、30代以下の女性は同年代の男性よりも非標準系の表現 を使用し、30代以上では男性と女性が逆転する、という興味深い事実を示している（真田ほか2011：22より）。本稿の調査対象の年齢分布から考えれば、この結論と合致している。

さらに面白いことに、20歳以下の女性と46歳以上の男性のa値平均はそれぞれ、22.2と10.0であることが集計でわかった。男性の母数が小さいので、全体的な傾向なのか否かはまだ不明であるが、本調査の結果からみれば、れっきとした違いである。

表4　A値平均と年齢・性別　クロス

性別／年齢	20歳以下	46歳以上
男	20.48	10.00
女	22.24	22.00

2）地域と干渉の度合い

全体的に、華中と西北地方あたりは、a値の平均がやや低い、つまり「逆向干渉」を受けにくく、一方東北、華北と華東地方は比較的a値の平均が高い、つまり「逆向干渉」を受けやすいということがいえよう。

それは沿岸部と内陸部との違いとして考えられる。まず中国全体の状況として、経済状況の関係もあって、内陸部は伝統的・保守的、沿岸部は開放的・革新的とよく言われている。海外の文化や価値観との接触がより頻繁に行われている華東、華北地方出身の人々にとって、（干渉も含め）異質なものを受け入れることは、抵抗が少ないかもしれない。なお、東北地方に関しては、歴史上日本から多大な影響を受けていることも挙げられる。

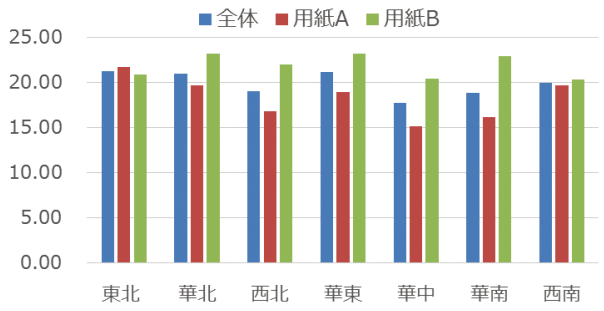


図11　地域／a値平均

ただし、中国における出身地と一番長く居住する地域との乖離、就学や就職などを伴う移動、他地域の人々との接触などは、日本人のそれよりもはるかに凄まじいものである。よって、最も長く居住する地域を調べるだけでは、実際の地域差を反映しきれない側面もあるだろう。また、インターネットやマスコミの発達により、言語の均質化が起こり、結果として、傾は見えるものの、際立つ違いといったものは見出されなかったといえよう。

3）日本語レベルと干渉の度合い

この調査の最も関心のある部分は、接触の強度（本稿では、習得した日本語の上達度で測っている）と「逆向干渉」の強度（本稿では、非文判断能力で測っている）との関係である。

接触の強度が増す（外国語の上達）のにしたがって、「逆向干渉」（外国語による影響）の度合いも強くなるのではないかというのが、大方の予想であろう。

また、§2.5で紹介した図4（渋谷2010：4）にもあったように、接触が進行してしまうと、母語はだんだん勢力が落ち、最終的に第二言語に取って変えられるとされている。

本稿の内容は、図4で示した状況からみれば、ごく初期のものであることがわかる。この接触の初めごろになにが起きているのだろうか。この質問に対する答えは、図12で示されている。

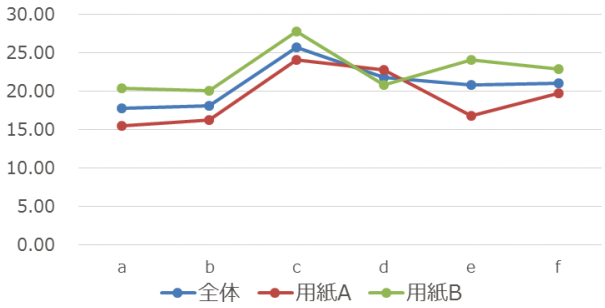


図12　日本語レベル／a値平均

結論から言えば、

1）外国語による母語への干渉は確実に観測された

日本語がまったくわからないaの時点より、上達していると思われるfの時点のほうが、a値の平均が高い。要するに、外国語を習得するにつれ、多かれ少なかれ、外国語による影響を受ける。

2）干渉は一直線に上昇しているわけではない

図12をみれば一目瞭然だが、a値の上昇は、cの時点でピークに達し、のちに下降を経て再び上昇するという性格を持つ。また、再び上昇するといっても、cのレベルに戻ることはない。

これを調査の状況で説明すると、日本語の習得による日本語から母語中国語への干渉は、入門～初級段階でピークに達し、その後徐々に減り、落ち着きを見せる。このことから、外国語の上達によって、脳も余裕をもつことができ、自己モニタリングもできるようになったのではないかと考える。

といったことが指摘できよう。

四、今後の課題：

本稿は、被調査者の性別、出身地域、日本語レベルなどの社会的属性と「逆向干渉」の度合いとの関係について、調査の結果を用い、初歩的な分析を試みた。

紙幅の関係で、基本的に各属性と干渉の度合いとの一対一の関係しか考察していないが、単一の属性ではなく、複数の属性と干渉の度合いに対しクロス集計等を行えば、さらに新しい発見ができるのではないかと考えている。また、これといった相関関係や傾向が見られない項目に関してもほかの視点で考察をしたいと思う。

最後に、調査方法としては、本稿のような横断調査よりも、同じ対象に対して縦断的調査を行ったほうがより正確な結果が得られると思われる。今後は、その可能性も検討するとともに調査を引き続き行いたいと思う。

引用文献

a）日本語

Ellis, Rod（1997／（訳）牧野高吉2003）『第２言語習得のメカニズム』筑摩書房

Sebba, Mark（1997／（訳）田中孝顕2013）『接触言語：ピジン語とクレオール語』きこ書房

Weinreich, Uriel（1953／（訳）神鳥武彦1976）『言語間の接触―その事態と問題点』岩波書店

東　照二（2000）『バイリンガリズム―二言語併用はいかに可能か』講談社

金　愛蘭（2011）「20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化」『阪大日本語研究　別冊3』

迫田久美子（2002）『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク：8-14

真田信治（2005）「言語と方言」『事典日本の多言語社会』（真田信治、庄司博史編）岩波書店：347-348

――――（2006）『社会言語学の展望』くろしお出版

――――、ダニエル・ロング、朝日祥之、簡月真（2010）『改訂版　社会言語学図集』秋山書店

白畑知彦、若林茂則、須田孝司（2004）『英語習得の「常識」「非常識」：第二言語習得研究からの検証』大修館書店

鈴木恵理子（2013）「中国人日本語学習者の逆行転移―日本滞在期間に注目して―」『秋田大学国際交流センター紀要 2』：3-18

渋谷勝己（2010）「移民言語研究の潮流：日系人日本語変種の言語生態論的研究に向けて」『待兼山論叢. 文化動態論篇. 44』：1－23

――――（2013）「多言語・多変種能力のモデル化試論」『コミュニケーション能力の諸相』（片岡邦好、池田佳子編）ひつじ書房：29-51

羅　沢宇（2015a）「目標言語から母語への逆向転移の実例――日本語から中国語へ」『静岡文化芸術大学研究紀要15』：89-96

b）中国語

贺　阳（2008）『现代汉语欧化语法现象研究』商务印书馆

罗泽宇（2015b）「量词“匹”特殊义项的生成与消亡――从日语对汉语影响的角度」『日本学研究24』：1-9

马西尼（1993 /（訳）黄河清1997）『现代汉语词汇的形成――十九世纪汉语外来词研究』中华书局

沈国威（2010）『近代中日词汇交流研究：汉字新词的创制、容受与共享』中华书局

―――（2011）「现代汉语“欧化语法现象”中的日语因素问题」『東アジア文化交渉研究　別冊7』：141-150

王东志（2009）「语言迁移研究的新视角：二语对母语的迁移」『北京第二外国语学院学报（2009年12期）』：14-21

俞理明、常辉、姜孟（2012）『语言迁移研究新视角』上海交通大学出版社

朱一凡（2011）『翻译与现代汉语的变迁（1905-1936）』外语教学与研究出版社

c）英語の文献

Chen, Fred Jyun-gwang.（2006）Interplay between Forward and Backward Transfer in L2 and L1 Writing: The Case of Chinese ESL Learners in the US. *Concentric: Studies in Linguistics* 32.1: 147-196.

Cook, Vivian.（1991）The poverty-of-the-stimulus argument and multi-competence. *Second Language Research* 7 (2): 103-117.

――――（ed.).（2003）Effects of the Second Language on the First. Multilingual Matters.

――――.（2008）Multi-Competence: Black Hole or Wormhole for Second Language Acquisition Research?. in ZhaoHong Han et al.（eds.) *Understanding Second Language Process*. Multilingual Matters: 16-26.

Trudgill, Peter.（2004）Dialects（second edition）. Routledge.

---

[1] 最初のCook（1991）では「the compound state of a mind with two grammars」と定義したが、「grammar」は生成文法的意味合いで用いたため、誤解を招いたという（Cook 2008：17)。のちに、現定義に修正した。

[2] 羅（2015a）同様、本稿も発話者や著作者が簡単に特定されないよう、アドレス情報や書名等を触れない。一部の情報を伏せた全用例の出所リストは、羅（2015a）の巻末に載っている。

[3] その調査では、「起きることができる」の意味で使われる「起きれる」のことを指している。